名馬でたどる **2** 千代田牧場 by 有吉正徳

ニッポーテイオー

グリィフォー 母チョダマサコ 1983-2016

1987年の11月は「千代田牧場のための11月」だった。1日に行われた天皇賞・秋でニッポーテイオーが逃げ切り勝ちを収めると、15日にはタレンティドガールがエリザベス女王杯で大本命馬を破る金星を挙げ、22日にはニッポーテイオーがマイルチャンピオンシップでGIレース2連勝を決めた。その前日の21日にはスリードーターが東京競馬場の一般戦で自身6勝日を挙げた。

1カ月のうちに、ひとつの牧場の生産馬がGI3 勝を挙げ、加えて一般戦で1勝。しかもスリードーター、ニッポーテイオー、タレンティドガールは、いずれも母チヨダマサコが初仔から3年連続で産んだ3きょうだいであり、すべて種牡馬が違うというのだから、二度驚かされる。

今回の「名馬でたどる千代田牧場」はニッポーテイオーとタレンティドガールというGIタイトルを持つ兄と妹のうち兄のニッポーテイオーを取り上げる。

 \Diamond

「マイルの帝王」と呼ばれたニッポーテイオーは 快速を生かし、ターフを駆け巡った。 3歳時の1986 年にはJRA賞の最優秀短距離馬に選ばれ、4歳時 の1987年には最優秀4歳以上牡馬と最優秀短距離馬 との2冠に輝いた。

通算21戦 8 勝。 8 勝のうち7 勝は重賞レースで、その内訳はG I 3 勝、G II 2 勝、G II 2 勝と文句のつけようのない内容だった。

「マイルの帝王」にふさわしく、距離1400mと1600mのレースは10戦 6 勝、2着4回と完璧に近い成績を残した。その一方で1986年の函館記念では、函館競馬場の芝2000mを1分58秒6という当時のコースレコードで駆け抜けている。1987年の天皇賞・秋では2着のレジェンドテイオーに5馬身差をつけた。5馬身という着差は天皇賞・秋が距離2000mに短縮された1984年以降では最大で今でも破られていない記録だ。

同じく1987年のマイルチャンピオンシップはニッポーテイオーのベストレースといえる。鞍上の郷原洋行騎手は最後の直線で追い出しを待つほどの余裕があった。それでいて、2着のセントシーザーにつけた着差は5馬身。この記録はタイキシャトルと並ぶ

同レースの最大着差として今も健在だ。

ニッポーテイオーはただ単に速いだけのマイラーではなく、宝塚記念 (2200m) で二度 2 着になったように距離もこなした。スピードに恵まれた中距離寄りのマイラーといえそうだ。

ニッポーテイオーは1983年4月21日、千代田牧場で誕生した。2023年は生誕40周年に当たる。父は英国産のリィフォー。凱旋門賞馬ダンシングブレーヴなどで知られるリファール産駒だ。フランスのGⅢクインシー賞(芝1600m)を勝ったぐらいの実績しかなかったが、種牡馬としては優秀だった。

現役を引退後の1979年にアイルランドで種付けし、その年に日本に輸入された。欧州に残してきた産駒の中に大物がいた。牝馬のロイヤルヒロインは米国でブリーダーズカップマイルをはじめGI3勝を挙げた。牡馬のトロメオは日本の皐月賞に当たる英2000ギニーで2着になった後、8月に米国に遠征。GIバドワイザーミリオンに出走して、伝説の名馬ジョンヘンリーをクビ差で破る金星を挙げた。この活躍によりリィフォーは日本で4年間種付けした後、米国にトレードされた。

リィフォーの日本での活動期間は短いものだったが、1987年はニッポーテイオーやアイランドゴッテスなどの活躍により、中央競馬の種牡馬別成績でノーザンテーストに次ぐ2位にランクインした。

ニッポーテイオーの母チヨダマサコは厩舎に入厩して40日ほどで新馬戦に優勝する実力馬だったが、骨盤骨折という故障に泣き、5戦1勝の成績で現役を引退し、繁殖牝馬になった。1982年、サンプリンスとの間に産んだ初仔が牝馬のスリードーターだった。翌年、リィフオーとの間に出産した2番仔がのちのニッポーテイオーである。

ニッポーテイオーの母系について、少しさかのぼらなければならない。母チヨダマサコの祖母はワールドハヤブサという1967年生まれのダイハード産駒だ。ダイハードは2世に旧8大競走の勝ち馬こそいなかったが、母の父として好結果を出した。フジノパーシア、スリージャイアンツが天皇賞・秋を制し、ハードバージが皐月賞で優勝した。生産地では、ダ

イハード牝馬が求められるようになった。

ダイハードを父に持つワールドハヤブサはまた名牝系の出身でもあった。その母オーハヤブサはオークス馬であり、さかのぼれば、1907年に小岩井農場が英国から輸入したビューチフルドリーマーにたどり着く。ビューチフルドリーマーを基にした牝系からは三冠馬シンザンやダービー馬タケホープなど数多くの名馬が誕生していた。

そんな良血のワールドハヤブサを買わないかという 話がきた。かなりの高額だったが、場主の飯田正(現 社長・飯田正剛の父)はその血統には魅力を感じ、 購入を決意した。蹄骨骨折の重傷を負っていたこと は、購入後に知ることになる。牧場では四肢に負担 がかからぬよう、枠場を利用して馬体をベルトで吊っ て保定していた。治療の甲斐あり、次のシーズンに は種付けすることができた。

ワールドハヤブサの代表産駒といえば、1979年にファバージとの間に生まれた7番仔、ビクトリアクラウンだ。1982年のエリザベス女王杯など重賞4勝を挙げた名馬である。1981年にはJRA賞最優秀2歳牝馬、1982年にはJRA賞最優秀3歳牝馬に選ばれた。ビクトリアクラウンを送り出す前に、ワールドハヤブサが1973年に産んだ初仔が牝馬のミスオーハヤブサだった。

ミスオーハヤブサは未熟児で生まれたため、競走 馬になることはできず、そのまま繁殖牝馬になった。 そして1977年、ラバージョンとの間に出産したのが ニッポーテイオーとタレンティドガールの母になるチョダマサコだった。米国から輸入されたラバージョ ンは日本で3年しか供用されず早死にしたが、飯田 正は高く評価していた。チョダマサコ、千代田牧場 のマサコとは、飯田正の妻・政子のことである。

1985年、2歳になったニッポーテイオーは美浦の 久保田金造調教師に預けられた。10月の東京競馬場 でデビュー戦を迎える。不良馬場の芝1600mを1分 38秒9で走り切った。2着とは2秒2もの大差がつ いていた。だが2戦目の万両賞は7着に終わった。

3歳初戦は当時、距離1600mで行われていた京成杯。逃げたダイナフェアリーを捉えられず2着に終わったが、のちに皐月賞で優勝する3着のダイナコスモスには4分の3馬身差をつけた。弥生賞は3着となり、皐月賞に挑んだが、大外の21番枠が響き8着となった。ダービートライアルのNHK杯で巻き返しを狙ったが、またしても8着に終わる。弥生

賞、皐月賞、NHK杯と2000mの距離で3連敗すると、久保田調教師はすっぱりとダービーをあきらめ、 短距離路線を選んだ。

ニュージーランドT4歳Sは当時、ダービーの前日に東京競馬場の芝1600mを舞台にして行われていた。2番人気に支持されたニッポーテイオーは好位から抜け出し、2着のダイナフェアリーに3馬身半差をつけて重賞初制覇を果たした。その後もラジオたんぱ賞(2着)、函館記念(1着)、毎日王冠(2着)、スワンS(1着)、マイルChS(2着)と連対を続けた。この年、1986年はまだ天皇賞・秋が3歳馬に開放されていなかった。開放されたのは翌1987年。条件変更があと1年早ければ、ニッポーテイオーの現役生活も違う形になったのかもしれない。

4歳時は京王杯スプリングC(1着)、安田記念(2着)、宝塚記念(2着)、毎日王冠(3着)、天皇賞・秋(1着)、マイルChS(1着)と6戦3勝、2着2回、3着1回とすべてのレースで馬券圏内に入ってみせた。

5歳時は京王杯スプリングC(2着)から安田記念優勝に結びつけ、宝塚記念ではタマモクロスの2着になった。このレースが現役最後のレースになった。1988年10月9日、東京競馬場で引退式が行われた。

翌年からレックススタッドで種牡馬活動を始めた。12シーズン種付けを行い、インターマイウェイ(大阪杯、函館記念)、ダイタクテイオー(毎日杯)の2頭のJRA重賞勝ち馬を出したが、自らに並ぶGI馬を送り出すことはできなかった。種牡馬引退後は浦河町のうらかわ優駿ビレッジ「AERU」で余生を送り、2016年8月、老衰のため、その生涯を閉じた。33歳の長寿だった。

 \Diamond

ワールドハヤブサの骨折や未熟児だったミスオーハヤブサを立ち直らせ、繁殖牝馬として成功させた。 「馬よりも先に人が諦めてはいけない」という千代田牧場の執念と熱意のたまものといえよう。切れかけた糸をつむいだ結晶がニッポーテイオーだった。

有吉正徳(ありよし・まさのり) 1957年1月、福岡県出身。 1982年、東京中日スポーツで競馬記者デビュー。1992年に朝日新聞に移る。ミスターシービー以降、コントレイルまで6頭の三冠馬を取材。2022年に定年退職し、フリーの競馬ライターに。著書に「2133日間のオグリキャップ」「第5コーナー〜競馬トリビア集」。朝日新聞金曜夕刊「有吉正徳の競馬ウィークリー」は連載20年。週刊競馬ブックで「一筆啓上」、JBBAニュースで「第5コーナー」を執筆。

2023.6.22